

立するものと考えた。そこで大事にな  
 ってくるのが一人一人がどれだけ  
 のことを調べる為、次のような実態調  
 査を行った。(資料2) (調査内容は省略)

○ 一年から四年までの植物教材の中  
 で、条件や環境に関する問題につい  
 ての調査

○ 五年 観点別到達度学力検査実施  
 (教研式)

この結果を利用し、一位を上位の子、  
 二十一位を中位の子、最下位の四十二  
 位の子として抽出し、パンフレットそ  
 のままを資料として載せた。

○ 雷神山の知識調査

○ 植物の成長についての調査

これは、成長について、今までの学  
 習のどういう内容をこの単元に生かし  
 ていこうと考えているのかを見る調査

以上の調査により、個人の知識能力  
 全体の知識の落ち込みが明確になり、  
 この単元に必要欠くべからざる学習内  
 容についての補充を行い、既習事項の  
 掘り起こしをした。

④ 自然の変化を鋭く見つめる目を育  
 てる為の指導(資料3)

○ 一回山に入ることに変化の様子で  
 気づいたことをメモさせ、意識して  
 自然の変化を見つけていったこ  
 とは効果的だった。

○ 一回ごとの感想を提出させ、鋭く  
 見つめる目をもってきた変容を、教  
 師がすぐ気づいてやり賞賛を与えた  
 ことにより、また新たな鋭く見つめ

る意識をもたせることにつながって  
 いった。

○ 感想も書けないような低次の子は、  
 この自然の変化を鋭く見つめる目が  
 育っていない為に書けないでいるの  
 で、山へ入った際、一緒に行ってど  
 んな気づきをしているのかを引き出  
 させ、自分の気づき(発見の意味)  
 に気がつかせてあげるよう助言指導  
 していった。ちよつとした助言が意  
 欲へつながつたり、課題解決への糸  
 口になることが多く、教師の手助け  
 の必要性、重要性を感じた。

○ 自然の変化を鋭く見つめる目を育  
 てるには、自然の変化が大きい季節  
 を選ぶことも手立ての一つである。  
 その意味で、植物の成長が大きい若  
 葉のころを選んだことはよかつたよ  
 うだ。

○ 教師はひそかに冬の様子を写真で  
 取めておき、若葉のころと比較させ  
 る為の資料を作っておくことも必要  
 である。季節の変化による驚きは、  
 だれの目から見ても大きなものとし  
 てとらえることができた。

○ 他の子には気づかなかつた気づき  
 のもてた子には、大いに賞賛を与え  
 てやったため、自分だけしか気づか  
 ないことを見つけようという意識を  
 いだかせた。

⑤ 自然から直接学ぶことによる感受  
 性の育成

この単元では、植物の総合学習とい  
 うことなので、植物の生存競争にまで

目を向け、生命尊重といった態度を養  
 える機会でもある。

実際、この単元のもよみの授業を行  
 った時、子どもたちはC地区の赤松の  
 育てない様子やB地区・E地区の枯死  
 した木の様子は、競争に負けたもので  
 あることを知り、自然界のしくみを恐  
 ろしいもの、厳しいものと嘆き、植物  
 に哀れみさえもつようになつた。その  
 ときの感想を、雷神山を学習して(資  
 料)子どものパンフレットの中から)と  
 題して、単元のもよみを感受性豊かに  
 表現している子どもがたくさんいた。  
 また、はじめから植物に生命を感じ  
 たり、人間と比較しながら観察してい  
 った子どももいた。(資料略)



初夏の雷神山E地区(うっそうと繁る落葉樹)

大いに賞賛し、できる限りみんなの前  
 で取り上げ、感情表現を多く取り入れ  
 た自分の(自分にしか作れない意味)  
 パンフレットづくりが心がけるよう指  
 導していった。

⑥ 多様な考えを生かしながら、統一  
 的な見方のできる目を育てる為の指  
 導

○ 指導計画上で、個人追究学習を重  
 視しながらも、一斉学習の二本立て  
 という形をとつたのも多様性の中の  
 統一性を推し量つていった為である。

○ 個人追究学習において、自然条件  
 は、単一条件ではなく、複雑な因果  
 関係による様々な条件があることを  
 学んでいった。しかし、個人の追究  
 だけでは不確かである為、話し合い  
 によって統一的条件があることに気  
 づける場を与えていった。さらに、  
 話し合いの練り上げにより、植物同  
 志が相互に影響し合つて成長してい  
 ることもとらえていった。

⑦ 下位の子どもの目標達成のための  
 指導  
 個人研究でなんといっても心配され  
 るのは、下位の子どもが課題を未解決  
 のまま終わつてしまいはしないかとい  
 うことであつた。

下位の子は、感想すら書くことがな  
 いと投げ出した気持ちで、意欲が感  
 じられない。また、指導から離れると  
 すぐ遊んでしまう。

そこで指導に当たっては、感想だけ  
 は絶対書かせるという強い意志をもつ